

懸賞放送ドラマ集1982



社団法人 日本放送作家協会

賞 放送ドラマ集1982



社団法人 日本放送作家協会

昭和五十八年二月二十五日発行 ©

懸賞放送ドラマ集〈1982〉

発行 社団法人 日本放送作家協会
東京都港区六本木六丁目五 ハラビル一階
電話(四〇二)五九九六・六二九五

発行人 阿 木 翁 助
編集人 門 川 美 代 子

製作 株式会社 中央公論事業出版
東京都千代田区丸の内二十四ー一 丸ビル588
電話(二〇二)一一二一〜三

刊行のことば

日本放送作家協会主催、文化庁、放送文化基金助成による「ラジオドラマ脚本懸賞募集」は今年十一回を、また「テレビドラマ脚本懸賞募集」は今年第七回を、それぞれ迎え、両部門の新人発掘の事業は、今年も無事終了いたしました。

毎年のことですが両部門とも、作品の質的水準は一きわ高くなったものが感じられます。すでに御案内のように入選作はNHKによって放送されます上に、入選・佳作の作品は悉く活字として、世に紹介されることになっております。

この出版もまた、新人発掘育成事業の一環として文化庁、放送文化基金の助成によるものであります。

この『集』によって、入選者は勿論、佳作入賞の方々のご努力をも無にすることなく、放送文芸発展のため、強力な資料として活用していただくことは、私共の深くよるこびとすることにあります。

この一冊が、放送文芸に志す方々の参考資料となり、テキストともなって活用されることを期待いたします。

今後とも、この事業をつづけ、放送文芸ひいては放送そのものの向上に資したいと存じますので、各方面の御理解と御支援を心からお願いする次第でございます。

社団法人日本放送作家協会

理事長 阿木 翁 助

日本放送作家協会

理事長 阿 木 翁 助

創作テレビドラマ脚本懸賞公募

担当常務理事 横 光 晃

創作ラジオドラマ脚本懸賞公募

担当常務理事 水 原 明 人

懸賞放送ドラマ集 1982 ■ 目次

刊行のことば

阿木翁助 i

テレビドラマ

残照の中から

橋本和子 i

化石の声をきいた若者たち

石井弘子 39

部屋

森 邦夫 75

ラジオドラマ

水の中の祭り

山崎真佐子

111

遠くからの電話

斉藤紀美子

133

猫

小嶋雄嗣

157

選考経過／選評

テレビドラマ

183

ラジオドラマ

195

作者のことは

大人になって二十年。

その殆どを、主婦という座蒲団にのっかって、種々雑多なひま潰しに費してきました。

四十の声を聞いた時、何故か生きなければと、初めて思いました。

生きるということは何かと真正面から取組むこと……。私にとって、それは苦しみながらも細々と続けてきた言葉との格闘しかありません。残酷で優しくて不可解、そして限りなく哀しい人間が好きでならないからです。

社会という不特定多数の人々にもみくちやにされながら、私も傷つき、傷つけつつ、性懲りもなく、人間へのラブコールを繰返していききたいと思います。

〈テレビドラマ入選作〉 残照の中から

橋本 和子

人物

井村はな（六十八歳）長女、井村家当主

井村さと（六十五歳）次女、独身、元教師

相田ゆき（六十一歳）三女、未亡人、癌

浜本愛子（五十五歳）四女、離婚する

井村弥一（七十二歳）はなの婿、養鶏

雅代（四十二歳）一人娘、農業

信男（四十五歳）その婿、農業

紀子（十七歳）その長女、高三

歌子（十四歳）その次女、中三

相田勇一（三十三歳）ゆきの一人息子、会社員

崇子（二十九歳）その妻

光男（六歳）その長男

ゆかり（四歳）その長女

野上透（十九歳）大学生、紀子の先輩

五十嵐洋子（二十一歳）紀の川学園教師

病院の医者（四十九歳）

竹井医師（五十六歳）

看護婦

1 紀の川の土手（夕方）

蛇行し流れてゆく紀の川。

残照を浴びて立つ、旅装の井村さと。

懐かし気に周囲を見渡している。

2 井村家座敷（夕方）

相田ゆき（六十一歳）が蒲団を取り込んでいる。

井村はな（六十八歳）が蒲団カバーを取り換えている。

ゆき「まだ連絡ないの？ 五年振りや云うのにはよ帰っ

て来たらええのに……」

はな「そうせかんでも……退職してくんのやさかい、ず

うっと居るようになるが」

ゆき「そうやったね」

ゆき、嬉しそうに笑う。

はな「晩ごはんの方、どうなってる？」

ゆき「雅ちゃんが、畑、はよ切り上げて、スーパーで買

物して来る云うてたんやが……」

はな、置時計を見、

はな「二人共ぼちぼち帰るやろ」

3 紀の川の土手（夕方）

ボストンバッグを手に、ゆっくりと歩くさと。

後方から歩いてきた、制服姿の井村紀子（十七歳）、さとの後姿を見て、首を傾げる。紀子小走りになって、

紀子「おばさん……さとおばさん……？」

さと、ゆっくり首を廻す。

さと「まあ、紀ちゃん……」

さと、紀子の姿を上から下まで、感慨深げに見る。

紀子「お帰りなさい！ おばさん。退職おめでとう！」

さと「……五年振りだから。高校……」

紀子「三年です。歌子は中三。こんなとこ、ゆっくり歩

いてんと、はよ帰らな。みんな首、長うして待ってる

と思います。あの、おじいちゃんでさえ、ここのとこ

嬉しそうで」

さと「そう……みんな、元気？」

ゆっくり歩き出す二人。

紀子「ええ。こんなとこに住んでたら、変わりようない

みたい。おばあちゃんはやつぱしボスやし、ゆきおばちゃんは、いつも体の具合がどうか悪うて……今、一緒に住んでますねん」

さと「三郎さん亡くなって、もうずいぶんなるものね、勇ちゃんは？」

紀子「東京の大学出たきり、あっちで就職も結婚もしはって、減多に帰ってけえへんみたい」

さと「一人暮らしじゃ、はな姉さんも放とけないわね……それで愛子おばさんは？」

紀子「(笑う) 未だに、おじさんの浮気で泣いてはる。しょつ中、言いつけに来はんの。それにお父ちゃんは仕事あんまりせえへんしお母ちゃんは何か諦めてるみたいで……そうそう、おじいちゃん、ちょっと呆けてきたみたい。まともにしゃべってるか思たら全然関係ないこと云い出したりして……」

さと「そう、義兄さん……もう七十二歳ですものね……ありがと。大体、井村家の現状が把握できたわ」

紀子「おばさん、もうずっと家に居てはるんでしょ？」
さと「そう、置いてもらう積りよ。何十年も前の姉さんとの約束だし……とうとうお嫁にも行かなかったし」

紀子「約束？」

さと「そう……あの家出る時のね……」

土手の降り口に来て、さと、立ち止まり、改めて周囲を見渡す。

みかん山、見え隠れの高速度道路、墓地、新興住宅の一塊り、紀の川、段々畑。

さと「(呟くように) 帰ってきたんだわ、とうとう」

4 井村家の坂道

中程まで登ると、雑木林に囲まれた、昔ながらの農家が、落日に溶け込むように立っている。

生垣が始まると、紀子「ニュース、ニュース」と駆け出しに行く。

苦笑しながら、生垣や家のたたずまいを横目にゆっくりと歩くさと。

5 井村家門前

古ぼけた木の門に、古ぼけた「井村」の表札。
さと、そつと、表札の歪みをなおす。

6 同、前栽

鶏舎から出て来た井村弥一（七十二歳）、門前に佇む白い影にギクリと立ち止まる。

さとと弥一の眼が合う。

弥一「さとさん！」

さと、視線を外し、

さと「ただいま……又、お世話になります」

弥一、無言のままさとを見つめる。

玄関に賑やかな足音。

我に返るさと。

くるりと背を向け、庭の方に消える弥一。

はなが小走りに出て来る。

はな「よう帰って来た……よう……」

はな、さとの手を握りしめる。

さと「ただいま。姉さん……」

さと、はなの手を握り返しながら緊張が溶けてゆく感じ。

はなの背後に、ゆき、浜本愛子（五十五歳）、井本雅代（四十二歳）、紀子、歌子（十四歳）が立ち、口々に、「お帰り」

「迎えに行ったのに」等云っている。

さと「ありがとう、歓迎してくれて……」

さと、一人一人の顔を順番に眺めてゆく。

はな「あれ？ おじいちゃんは……」

歌子「トリ小屋とちゃう？ 楽しみにしてはったのに、

肝心な時、いてはれへん」

はな「さあさあ生れた家や、入った、入った」

7 同、門（夜）

賑やかな笑い声が、生垣越しに聞こえてくる。

通行人が、意外そうに灯りを見上げ通り過ぎて行く。

弥一、ゆっくりと周囲を見廻っている。空を見上げる弥一。

満天の星。

弥一「明日はええ天気じゃな」

と呟き、弥一、門に門をかける。

8 坂道（朝）

スポーツバッグを持った制服姿の紀子と歌子、急ぎ足。

歌子「ゆうべは賑やかやったねえ」

紀子「井村家では前代未聞やわ……カラオケ迄とび出してきて」

歌子「さとおばさん、よう六十五迄頑張りはったね」

紀子「立派やないの。公立やったら、とっくに停年やって、もっとはよ帰って来はったやろうに……あんたも

古文、しっかり習とき」

歌子「オールド四人姉妹か……」

紀子「あんた感じへんかった？」

歌子「何を？」

紀子「おばあちゃん……いつもと違うて何や、さとおばさんに氣イ遣てみたい」

歌子「五年振りやからやん……そやけど、結束固い井村家の次女がやで、結婚もせんと、一人だけ静岡みたい遠いところに行つてはったんやろ」

紀子「結婚だけが、女の生き方とちやいます。うちな、あのおばさんみたいになりたいわ。きれいで、理智的で、清らかで、痛っ！」

ボールが紀子の頭に当る。

歌子「テニスボールやわ」

歌子、拾ったボールを紀子に渡す。軽やかな足音と共に、ショートパンツをはいた野上透（十九歳）が現われる。

透「どうも……すみません……」

紀子、怒った顔でボールを渡す。

透「アレ？ 君、井村紀子……桐校三年四組の……」

紀子、ブンと横を向き、何か云いかけてる歌子の手を引張

って、足早に歩き出す。

苦笑しながら見送る透。

歌子、ニヤニヤして、

歌子「お姉ちゃん、有名なんやねえ」

紀子「阿呆！ ああいうんは不良……ああ？ あの人の二年先輩の野上透、いう人やわ。口、利いたこと無いけど、テニス部のキャプテンやつてはった……」

歌子「へえ！ 県大会で優勝しはった？（真似て）君、井村紀子、桐校の……私も、桐校、行けるんかなあ」

紀子「行きたいんか？」

歌子「……お姉ちゃん次第」

紀子「どういう意味？」

歌子「うん、一寸ね……その内」

紀子「勿体ぶって……私は、東京の大学に行かしてもらって、そうやな、先生か、弁護士。さとおばさんみたいに、自立した生き方したいの」

歌子、考える顔。

坂の下、バス停が見える。

最近手を入れたらしい、システムキッチン。

はなが食器を洗っている。

10 同、座敷

ゆきがはたきをかけている。

雅代が廊下を通りかかる。

ゆき「手をとめず」今から？ ごくろうさん」

雅代「胃の具合どうだい？ ゆうべ、大分食べてはったけど」

ど」

ゆき「さと姉さん、帰って来はって、胃も喜んでるのやろか、調子ええみたい」

ろか、調子ええみたい」

雅代「そろそろいいこと。そうそう、冷蔵庫に鮎入れてますよって、お昼、お願いします」

ますよって、お昼、お願いします」

ゆき「鮎？ もうそんな時期かのう」

雅代「まだ解禁前やさかい、養殖物でしょ」

クラクションの音。

雅代、首をすくめて笑う。

11 同、前栽

小型トラックと青い乗用車が置いてある。

トラックの中で信男、いらいらしてる。

鶏舎から弥一、バケツを持って出てくる。

雅代「おじいちゃん、玉子、どんな？」

雅代、助手席のドアを開ける。

弥一「嬉しそうに」ああ、七割方、生んどった」

雅代「へーえ、凄いい。ほな、行って来ます」

走り出す車。

12 走るトラックの中

運転している信男。

信男「今日はキャベツか？」

雅代「そう。はよ取ってしまわんと、堅なるわ」

信男「パート、何人頼んだ？」

雅代「五人……お父ちゃん……？」

疑わしそくに信男を見上げる雅代。

信男「うん……夕方、農協しまる前に取りに行くよって、な、取り入れの方、頼む」

雅代「もう、昨日かてそうやって……又、何か企らんでるんでしょ」

信男「……」

雅代「みかん山の消毒もせんならんし、ビニールハウス

の方もぼちぼちはずさな……トマトや胡瓜、むれるじやない」

信男「判った、判った。ローンに追われてる勤め人のおぼはん、ようけ居るやろ。そういうパート、上手に使うて、やってくれや」

雅代「何、考えてんのか……知らんわよ。おぼあちゃんお見透しなんやから」

信男「養子は辛いもう。せめて、子供のうちどっちかが男やったら、まだしもやで……一旗あげなな。お舅はんみたいになんのは、いややで」

雅代「二言目にはそれを云う。それにそない云うて、何かやっても失敗ばかり。おぼあちゃんかて、財布任しはらへんはずや」

信男「畜生！ 道路に取られた土地の代金、四千万は下らんやろな、税金引いても……まあみとけや、今に。

わしかて男じゃ」

前方をにらみつける信男。

雅代、諦め顔で笑っている。

縁側に座って、謡曲をうなっているはな。その横でゆきが縫い物を扱っている。

庭の木の陰に立つて、さとが二人を見ている。

14 同、鴨舎

黙々と玉子を集めている弥一。

或る程度、籠の中に玉子が溜まると、弥一、ダンボールの箱に詰めてゆく。

車の停まる音。

ドアの閉まる音。

弥一「雅代かあ？」

弥一、門の方をのぞく。

愛子が駆け込んでくる。

まっすぐに玄関へ。

15 同、座敷

愛子が駆け込んでくる。

愛子「姉ちゃん」

愛子、縁側にへたり込む。

はな、謡の本から顔をあげる。

ゆき、針を針山に刺す。